問屋町の女

（下巻）

花登筐

屋町の女（下巻）

花登筐

集英社

問屋町の女　下巻

一九八三年　六　月二五日　第一刷発行

定　価　九八〇円

著　者　花登　筐

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部（〇三）二三八―二八四二
販売部（〇三）二三〇―六一七一
印刷所　凸版印刷株式会社
検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1983　K. HANATO Printed in Japan

ISBN4-08-772439-5 C0093

問屋町の女　下　目次

偶数の組織　5
女ではない女　33
洗脳者の遠謀　105
さまざまな女心　156
より大きく　229

装画　成瀬数富

装丁　三村　淳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

問屋町の女　下

偶数の組織

1

その夜、瀬利子の熱は三十八度まで上がっていた。

「病気の旦那さんのことを忘れろということは無理かも知れないが、あんたも病人であることを忘れないように。当分安静ですよ」

担当の医師の叱責とも言える言葉に「すみません」とだけしか答えなかった瀬利子であったが、その発熱の原因が高田の結婚を聞いた衝撃からの気落ちから来たことは半ば認めていた。

忠一の生還で高田との結婚がご破算になったことは承知の上のことであった。

それなのに高田が結婚したと知った途端のこの気落ちは何を意味しているのであろうか——。

恐らく寛一の好意を示させようとして届けたすしで食中毒を起こして「殺す気か！」と怒鳴り、看護婦にまで悪妻であることを告げる夫の忠一の姿をまじまじと見せつけられた時に、チエ子から高田が結婚したことを教えられたからではあるまいか——。

それが忠一のいわれなき怒りに接した直後に、高田の結婚を知ったことに繋がったのではなかろうか——。

だが瀬利子は（すべて覚悟の上だった）と自分で言い聞かせながらも、忠一との今後の夫婦生活を考えると心は暗かった。

きっぱりと高田との結婚をあきらめて、忘れようとしている瀬利子に、その高田とのことを思い出させるのが忠一であったからである。

「おばさん。許して……」

青ざめた顔の寛一が病室へ姿を見せたのは、そんな医師が帰った後であった。

「チエ子さんから知らせが中川さんに入って、驚いて名古屋のすし屋まで行ったんだ。そしたらすし屋さんにも叱られた」

消え入りそうな声で詫びる寛一を叱っても仕方がなかった。

「けどおばさん、僕は終戦後靴磨きをやりながらゴミ箱の中をあさってまで、いろいろな物を食べて来て何ともなかったから、高いすしが腐るなんて知らなかったんだ」

「寛ちゃん。いいの。あんたの気持はよくわかるわ。但

し、おじさんに……」
「勿論、今からあやまりに行くし、看病してくれているチエ子さんに代って僕が付く。おじさんに怒鳴られても、どうされても僕が治るまで傍に居る。だから……」
「そうしてあげて」
瀬利子は部屋から出て行く寛一を見て、やはり涙がこみ上げて来た。
寛一が自分のしたことで迷惑をかけ、自責の念を持ち、「いやなヤツ」と称した忠一を看病すると言ってくれたことに、成長があったことを知ったからである。

それから寛一が、忠一の病室で付きっきりで看病をしていたことは瀬利子も、チエ子から聴いて知っていたし、無論、第三店で働かないでいることも承知していた。
しかし、瀬利子はそれについては、何も言わなかった。
店長の寛一が店へ出ぬことで、より従業員との断絶を起こすであろうことは、瀬利子も考えていた。
だが仮にそれで断絶が深まっても、彼が人間的に成長することで、店へ戻った時の成果を考えると、遥かにその方が好結果に繋がると思ったからである。
初めの一日、二日はやはり忠一も寛一に辛く当ったり、白眼視したらしく、寛一も居辛かったのか瀬利子の部屋へちょいちょい顔を見せた。
愚痴こそこぼさなかったが、いかにも辛そうで淋しげな表情がそれを物語っていたし、時には何か訴えたげな素振りも見せた。
しかし、瀬利子は先を制し、
「寛ちゃん、看病をすることはあなたが自分から言い出したことでしょう。男が一度言い出したことは、とことんおやりなさい。その為に店の成績がどうなろうとおばさんは文句は言わないわ。ただおじさんの看病をしている間はこの部屋には来ないで」
「どうしてなんだ？　おばさんのことも心配だよ」
「その気持は嬉しいけど、ちょいちょい私の部屋へ来ていることを知ったら、おじさんはどう思うかしら？　私が寛ちゃんに行かせているように思って、折角の寛ちゃんのおじさんに対する好意が台なしになるでしょう。だからおじさんに寛ちゃんの誠意が通じるまでじっと居てあげてほしいの」
そう告げて来させなかった。
そんな瀬利子の真意が、チエ子にも伝わったのか、チエ子の方は逆に忠一の方には二日に一度ぐらい、少し顔を出すだけであったらしいのは、食中毒の治りが遅く、他の食べ物は一切医師から厳禁されている為であった。
それでも忠一は、
「瀬利子の所へだけ運んでいるのか」

と僻みを見せて、チエ子に毒づいているらしかった。
「ただ、私は何を言われても、お医者さんの命令ですからと、笑っているだけですの。そしたら寛ちゃんが『おじさん、もう少しの辛抱だから』と慰めておられますわ」
そんなチエ子の説明は、寛一と忠一の間に何かしらのわだかまりが解けて来ているようで、瀬利子をほっとさせていた。
だから瀬利子も意識的に忠一の部屋には行かなかった。
「自分の婿さんが病気だと言うのに嫁が心配になれえせんのかのう」
相変らず、さよは皮肉ったが、熊井けい子から、
「野田さん。そう言えば野田さんの息子さん夫婦も近頃、お見舞に来られせんですなあ」
と言われると何も言わなかったのは、やはり一対二の現象であろうか――。
一週間経って瀬利子は完全に健康を取り戻して、医師からも、
「いつ退院してもよいですよ」
との許可が出たが、夫の忠一の方はなかなか回復しなかったのは、引揚げでかなり過労した体が、漸く治りかけたところへ食中毒というアクシデントに見舞われて、体力的にも回復力が生じなかったのではあるまいか。
（うまくいかぬもの……）
瀬利子はしみじみとそう思った。
夫の忠一に退院許可が出ようとする頃に、瀬利子の風邪がぶり返した。そして夫の忠一が食中毒で回復が遅々として進まぬと、今度は瀬利子の方に退院の許可が出る。〈てれこ〉とは関西の言葉であると誰かから聞いたが、〈すれ違い〉の意味である。そう言えば、ハルピンへ行った忠一が、現地召集を受けたと聞き、急ぎ二人の子供を連れて訪ねて行ったら、もう間に合わなかったし、辛苦を重ねて内地へ帰って来て、高田と知り合い、シベリヤで夫忠一は死亡と認められ、結納まで交わしたら、夫の忠一が生還して来た。
正しく〈てれこ〉の連続ではないか――。
退院許可の出た瀬利子がそこで再び迷わねばならなかったのは、瀬利子に対する医師の気遣いで、退院出来た筈の夫の忠一の許可が引き延ばされたからである。
瀬利子は、その為に食中毒を起こし、退院出来ぬ忠一を放って自分が退院してもよいであろうかと考えたのである。
「そんな遠慮する必要はありません」
それが珍しく夫婦揃って訪ねて来た中川夫妻の意見であった。

「奥さんは仕事を持って居られるのです。その仕事がうまくいかないと、旦那さんの入院代も出ないんですよ。それに今はそろそろ来年の春物にかかっているんです。病気の奥さんに心配をかけまいと、今日まで黙っていましたが、あの三宅は春物は自分が決めると言って来ているんです。その裁断を決めて頂くのは奥さんです。私としては一日も早く退院して頂いて仕事にかかって頂きたいのです」

夫忠一の入院代ということは、瀬利子の入院代のことも意味しているのである。瀬利子は決心して、一週間ぶりに夫の忠一の部屋へ入った。

「おばさん……」と叫んだ寛一は、スプーンで忠一の口に粥を入れていた時であった。そんな雰囲気に、既に心の触れ合っている叔父と甥の姿があった。

「おばさん、もう起きてもいいの？」

その寛一の質問の中には、忠一が「何故、瀬利子が来ないのか」と問い糺し続けている忠一の言葉がありありと現われていた。

「やっと先生にお許しを得たの」

瀬利子は寛一の持つ手のスプーンを取ると夫の忠一の口に粥を入れようとした。

「お前なんかに食べさせて貰いとうはあれせん！」

それが一週間ぶりに聞く夫の言葉であった。

「おじさん。何を言ってるんです。おばさんが動けないので、この僕がおばさんの代りに看病していたのですよ。看病出来なかったおばさんの気持も少しはわかってあげて下さい」

その寛一の口調には、かつて見た忠一に対する棘のある責めは見えなかった。

しかし、忠一は、

「寛一、お前は若いからわかれせん。夫婦というものは、どれだけ女房が病気で寝とっても亭主が悪いと聴いたら、たとえ一日一回だけでも顔を見せるもんじゃ」

それは古い日本の夫婦の倫理であった。しかし、シベリヤから引揚げて来て、現在の日本がどう変ったのか、その空気にも触れず、いきなり入院した忠一にとっては、戦時中、いや戦前の夫婦の姿そのままが、今も通じていると思っているのであろう。

「あなた少しでも召し上がって下さい」

それでも瀬利子がスプーンで粥を夫の口へ入れようとしたのは、あまりにもやつれ果てた夫の顔を見たからである。

「要りやあせん」

忠一は瀬利子の手を払いのけ、スプーンが床に飛んだ。

「おじさん……」と、再びとめようとする寛一に、忠一は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「寛一、お前だけでええ。わしは退院したらお前の店へ行くからのう……」
と告げていた。
退院するとも告げずに忠一の病室を出ようとした瀬利子には、もう悲しみも怒りもなかった。
寛一が忠一と心の繋がりを持ってくれたことを、目のあたりに見たからである。
寛一は瀬利子の実の甥。その甥が義理の叔父と親しんでくれることは、ひいてはいずれ瀬利子とも心が元へ戻って、通じることになるからである。
瀬利子は再び寛一が、拭いたスプーンで忠一の口へ粥を入れるのを見ながら、部屋を出た途端、
「あの女、何しに来た！」
との忠一の声が聞こえた。

2

翌日、瀬利子は中川夫妻に付き添われて退院した。
第三店で「お帰りなさい！」との日野次長以下の従業員の迎える声が弾んでいたのは、いかに瀬利子の帰りを待ち望んでいてくれたかが、よく分かった。
「いろいろ心配をかけました」
との挨拶に、五島京子が駆けより、涙ぐみながら「奥さん」と手を握りしめてくれたのが嬉しかったし、信男が「お母ちゃん！」と縋りついてくれたのにもやはり母として涙が出た。続々と知らせを聴いた第二店の従業員達も集まり、歓びの眼を輝かせてくれた。
誰も彼もが、自分を待っていてくれた――。
それが瀬利子には何よりも嬉しかったのである。
その夜、退院祝いをすることを中川が申し出てくれた。
忠一がまだ入院中だし、付き添ってくれている寛一に対してもと、ためらったが素直に受け入れることにしたのは、やはり商人として、今後の方針を定めることが、第一だと思ったからである。
その退院祝いの席には寛一と、奥で信男を寝かせてくれているらしい第二店のチエ子以外の全従業員が集まった。
「いろいろとご心配をかけまして……」と頭を下げる瀬利子に、工場の代表で一人出た三宅が、
「奥さん、ご主人も入院してなさることだし、こっちはまかせておいてもらってもかまわせんで……」
と、早くもわが物顔を見せた。
「いえ、主人には寛ちゃんがついていてくれますし、何とか営業成績を上げて、焼けた第一店も再興したいと思いますので……」
「それもまかせておいてもらえば来年には必ず……」

尚も言い出す三宅に中川が「まあ三宅さん、奥さんのお話を聴けよ」とたしなめた。それが気に食わなかったのか、「売れる売れんは話では決れえせん」とビールを飲み出した三宅は、この前の火事の時より更に背延びしている様子であった。

「三宅さんのおっしゃるように売れる売れないは、単なるお話だけでは決りません。しかし一人だけの考えだけでも決らないと思います」

三宅がビールのコップを置いた。

「確かに今度は三宅さんの考えの無地物が売れましたし、私の考えの柄物が外れました。しかしこれが逆になることもあるのです」

中川や日野、玉川両次長や従業員達もかなり強くうなずいたのは、三宅に対する反感意識が益々高まっていることを物語っていた。

「その通りです。奥さん」と珍しく玉川次長が発言した。

「私はこの頃、中川店長と話し合っているのですが、売れる商品、売れない商品を見分けるのは考えでなて勘だと思うんです。今年は奥さんの勘が外れて、三宅さんの勘が……」

「素人と玄人の勘の違いじゃ」

三宅が小憎らしげに呟くと、瀬利子は、

「確かに三宅さんは玄人です。でも私は勘だけではないと思うのです」

「そうです。玄人の勘だけで当るのなら、一宮界隈の織物屋さん、どこも大儲けしてますわ」

これは五島京子の発言だった。

「今、五島さんの言われた通り、現に玄人の織物屋さんも大損を出しておられる所があります。つまり玄人の勘を頼りに商売をなさってたからです。それは昔はその勘が通用してたかも知れません。しかしそれは、昔は今のような流行の大変化がなかったからだとも思います」

渋い顔の三宅が発言する前に瀬利子は先を制して、

「ですが今の時代、いえこれからの時代は違うんです。まず流行を誰が作るかということです。今度の無地物は紡績が作りました。紡績が無地物を大量に作って卸し、それが問屋を通じて、小売屋の店に並べられる。それだけで流行となったのです。つまりお客の方にも戸惑いがあったのです。私が病院のベッドでいろいろと考えたのは、そのお客の戸惑いがいつまで続くかということです」

瀬利子はそこで一同を見廻した。

「何を言うのか」と言わぬばかりの三宅以外の者は、瀬利子を凝視した。

「戦後、急に新し物好きになったお客は、付和雷同とでも言いますか、極端な話一人が何か着たら、うわっと同

じものに飛びつきました。今度の無地物もその現われです。そんな現象が来年も、いや二、三年も続くかも知れませんし、また今年が流行したからといって来年はどうなるかも知れません。もしお客が自分の嗜好を取り戻して、自分で着たい物を選ばれたらどうなるか？　つまりお客の心に落着きが出たら今年のように無地物ばかりは売れません。私はいつか紡績の作る物が流行を……と言ったことがあります。ですが、それすら分からなくなって来て紡績も大損をするかも知れないと思うのです。つまりお客の戸惑いがいつまで続くかということです。私が勘とは言わずに、あえて〈考え〉と言ったのはそれなのです。売れる商品を出す為にはその〈考え〉が必要になったのです。来年はお客が何を求めるだろうか？　勿論、紡績が何を作ろうとしているだろうか？　と考えることも必要です」

「待った！」と三宅が高い声を発した。

「奥さん、たった今、紡績がその流行を作ることすら分かれせんで大損こくかも知れんと言った筈だが……」

「三宅さん。素人の私がこんなことを考えている以上、大会社の紡績さんも当然その問題は考えておられると思うからです」

「いや紡績は今うけに入って、来年も無地物をと言っとる」

「それで無地物が売れなくって紡績が損を出されたら、必死になって〈考えられる〉のではないでしょうか？　ですから紡績の動きや考えも今から知ってなくてはならないのです」

三宅は解せたのか解せなかったのか、またビールを自分で注いで飲んだ。

「とは言え、これは一人の〈考え〉では到底分かることではありません。より多くの人達の〈考え〉で見きわめることが必要なんです。その為には皆一人ずつが、どんな些細なことでも情報を集めて知ることが必要です。その為には組織が必要です。ですから、私は組織作りをすることにしました。本格的な法人化にするのです」

「法人？」と三宅が尋ねた。

「株式会社とすることです。では私の考えた構想を発表します」

瀬利子はメモを取り出した。

一同の凝視は続いた。

「まず社長は私がします。専務取締役には中川さんになってもらい、今までの第二店長を第一店長と変え、兼ねて頂きます」

「僕が？　しかし寛一君も居ることだし……」

中川はやはりためらいを見せた。

「中川さん。私は主人が居ても社長になると言ってるの

ですよ。寛ちゃんには常務取締役として、今までの第三店を第二店と変え、その店長を兼ねさせますと同時に、玉川さんと日野さんを取締役としてそれぞれ次長を兼任して頂きます」
「このわしらが重役に？」
日野も玉川も複雑な表情で顔を見合わせた。
「重役と言ってもピンからキリまであるでねやあか。何百人て社員の居る会社の重役も居れば、僅か二、三十人の会社もある……」
皮肉げな三宅の発言は、自分の名がまだ出ぬことの不満を明らかに現わしていた。
「その通りです。でもその何百人て大会社も、初めは五人、十人から大きくなって行ったのと違いますか。私も、そんな大きい会社にしたくて組織作りをしたいのです」
「それで工場の方の組織とかは、どうなるんですかの？」
焦れた三宅は催促した。
「工場長は従来通り三宅さんで、取締役として兼務して頂きます」
「ほう。わしも重役に入れて下さるんで？」
「勿論です。しかしあくまで製造だけに専念して頂きます」
三宅は怪訝そうに瀬利子を見た。
「そして、製造関係の責任者は、常務取締役として五島京子さんになって頂きます」
「私に？」
この発表は五島京子自身は勿論のこと全員を驚かせたらしい。
「と言うことは、このわしの上にその娘がなるということですかの？」
三宅は怒気を含んで尋ねた。
「そうです。あなたは日野さん達と同じ平の取締役、五島さんは常務ですから……」
「すると、このわしは素人のこの娘からいちいち指図を受けなならんということですかの？」
「指図とか、どうとかではありません。次はどんな製品を作るかどうかは、あくまで私と中川さん、玉川さんと日野さん、それに五島さん、それにあなたも加わった重役会議で決めるのです。その決められた通りにあなたは製造して、それが忠実に製造されているかどうかを確かめるのが五島さんで、その商品を販売する責任者が専務の中川さんです」
「では、その娘はこのわしの監視役と言うことかの？」
「いいえ。製造全体の監視役です」
瀬利子は一同を見渡した。
「皆さんの中には五島さんより古い方もおられます。で

すがあえて私が五島さんに重役になって頂いたのは五島さんが女性だからです。婦人服を作る以上、女性の眼が必要です。と同時に工場で縫製している人達は殆ど女性です。今、三宅さんが工場のすべてをやって下さってますが、男性の三宅さんにそんな女性の人達が相談出来ないこともある筈です。ですからあくまで三宅さんは製造だけ、後のことは一切女性の五島さんに見てもらうと同時に、工場へ顔を出せない私の代理の仕事をもして頂くのです。その為に五島京子さんを選んだのです。そのことは理解して下さい」

そこへ中川の妻のチエ子が漸く顔を出した。

瀬利子はチエ子を見て、

「本来なら、元の第三店の店長であるチエ子さんにとも考えました。しかしチエ子さんは中川さんの妻としての主婦業や、信男のこととかいろいろな雑用もお願いしてあります。これ以上負担もおかけしたくないので役職から外しました。それにそろそろ赤ちゃんも産んで貰わないとならないからです」

チエ子が第三店の店長として、出産をコントロールしていたことは、瀬利子も想像していた。

「ですが、チエ子さんはあくまで会社の嘱託として、何かある時は手伝って頂きたいと思います。チエ子さん、それでよろしいでしょうか？」

「よいも悪いも、私もその方が有難いと思います」

チエ子の代りに中川が答えた。

「とは言えこれで決定したわけではありません。これはあくまで焼けた元の第一店が出来上がるまでの組織です。もう一店出来たらこの中のどなたかの一人に店長になって頂かねばなりません。その為にも頑張って頂きたいのです。何か異議のある方は申し出て下さい」

「わしはある！」

やはり三宅が申し出た。

「わしは今日まで奥さんの為に働いて来たし、売れる商品も作って来た。そんだのに素人の娘に……」

「三宅さん。あなたはあくまで技術者です。縫製の技術の素晴しいことは認めてます。ですが技術者であっても管理者ではないのです。この中の誰かが商品を取りに行っても、自分の気に入った人には数多く渡したり、気に入らない人には少く渡す。それは組織の中の人間がすることではないのです」

瀬利子の言葉は辛辣であった。

「それとあの縫製工場で働く人が、一ケ月に何人辞めて行ってるか、ご存知ですか？」

「そりゃ、ど素人は辞めさせているが、すぐに補充はしとる」

「人数じゃないんです。私の言いたいのは、その素人の

人にいかに縫製技術を教え、玄人にして頂くのかがあなたのお仕事だということです」
「しかし、どうにもなれせん者は置いとけは出来いせん」
「そうでしょうか？　あなたは『肩が張ったから肩を揉め、お酒の酌をしろ、それが弟子の礼儀だ』と言っとられるそうですね。職人気質、徒弟制度としてわからぬことはありません。ですがあの工場はあなたの工場ではないのです。今までは私の工場、これからは会社の工場なんです。そしてあなたは、あくまで一技術者なのです。そんなことを嫌って辞めて行く人が居るとしたら困るのです」
　途端に三宅は耐えかねたのか、ビール瓶を持って仁王立ちとなり、
「誰がそんな告げ口をしやがった？」
　とわめいた。
　そんな三宅に対して一同の反応は冷ややかであった。
「三宅さん。そんなことは告げ口しなくとも、自然に耳に入って来るものだよ」
　やはり中川が対応した。
「お前が告げ口をして、このわしを陥れようとしたのか！」
「三宅さんよ。お前さんのことは、ここに居るみんなが良うは思っとれせん」
　日野が間髪を入れずに言うと、玉川も続いた。
「うちの連中も工場へ行くのはいやがって困っとるのだわ」
　それが偽りではないのは、従業員達の三宅を見る眼が何よりも物語っていた。
　四面楚歌の状態であることを知った三宅は、
「このわしが辞めればええんだろ。ほんだけど、これだけの店が出来たんは誰のお陰だ！　儲けさせとくだけ儲けさせて後は要れせんと言うのか！」
　そう食ってかかられては、瀬利子も黙って居られなかった。
「三宅さん。初めて私と逢った時のことを忘れられたんですか？　一宮のこともお忘れですか？　何なら関係者の方に全部集まってもらって話合いをしましょうか？」
　賭博や、妻のこと。幸織物の社長を通じて解決して、現に今も瀬利子が彼の借金を返済していることは口に出さなかったが、三宅が急に沈黙を守ったのはそれからであった。
「三宅さん、私は恩きせがましいことを言おうとしているのではありませんし、また辞めてくれとも言っているわけでもないんです。あなたの腕で、ただいい商品を製造してほしいと言っているだけです。その製造された商

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.